

日本IT書紀

060 機密戦争日誌

04 含牙篇
卷之八 重濁

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

機密戦争日誌

一

本書は「戦記もの」ではないので、第二次大戦、ことに太平洋戦争について、その経過を詳細に語る紙幅を持たない。ただ、次の観点から、太平洋戦争のポイントとなった事実を積み重ねようと考えている。

その観点とは、

- ① ようやく国内で普及段階にあった計算機の利用を中断した重大な事件であったこと。
- ② きわめて計数的な手法で運営されたこと。
- ③ その運営に当たっては長期にわたる多くの可変数の組み合わせを必要としたこと。
- ④ 意思決定において情報の収集と分析が重きをなしたこと。
- ⑤ 計算機ばかりでなく、様々な電子機器が彼我の優劣と勝敗の決定に関与したこと。

- ⑥ 極限の競争状況の中で新しい技術が開発されたこと。
- ⑦ ときに個人の能力が思いもせず発揮され、戦局を左右したこと。

——などである。

そこで戦争の経過を語りつつ「情報」（計算機で処理されたデータの意味に限定しない）というものを概観していきたい。主に使用した文献資料は、世界文化社『日本歴史シリーズ・太平洋戦争』、岩波新書『太平洋戦争』、柳田邦夫『零式戦闘機』『零戦燃ゆ』、秦郁彦『戦後史の謎を追う』などである。

教科書日本史などでは、一九四二年（昭和十六）十二月八日から四五年（昭和二十）八月十五日までの戦争は「第二次大戦」の呼称で一括りにされる。ただ、この戦争は大きく二つの局面、すなわち太平洋戦争と大東亜戦争で成り立っている。

ざっくりいえば、太平洋戦争は海軍の、大東亜戦争は陸軍の戦いだった。海軍と陸軍は戦争の思想が異なっていたから、経緯にも自ずから質的な相違がある。そのことは追々明らかになる。

表題の『機密戦争日誌』は、終戦直後、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の度重なる調査にもかかわらず発

見されなかつた。ポツダム宣言無条件受諾の報が伝わると、戦争犯罪の証拠となりそうな大量の書類が焼却された。

『機密戦争日誌』も煙になつて消滅したと考えられていたが、紆余曲折を経て門外不出の機密文書として防衛庁図書館に秘蔵されることとなつた。

一九九八年十月、錦正社が刊行した際に付された序文には次のようにある。

今回防衛庁防衛研究所所蔵の大本営陸軍部第二十班（戦争指導班）の昭和十五年六月一日から二十年八月一日に至る業務日誌「機密戦争日誌」を刊行することが出来たことは、本会にとつても多くの研究者にとつても大きな慶びとする所である。元来大本営内の各部課でも業務日誌を作成していたと思われるが、現存するものはこの第二十班（戦争指導班）のもののみである。敗戦にあたり、書類焼却指令が出されていた中で、これが残存しえたのは一人の庶務将校が焼却に忍びなく、これを含む一連の文書を密かに隠匿したことによるのであつて、今日となつて我々はその恩恵に預かることが出来るのである。

極東裁判が終結し、サンフランシスコ講和条約が発効して以後、初めて一部関係者にその実在が知らされた。太平

洋戦争に関する日本側の第一級資料とされている。

その日誌には一九四一年八月二十二日のこととして、

陸軍省案を加味したるものにて部長会議開催。前後四時間にわたり審議し、対米英戦決意を決定す。次長、対米英戦決意の意見牢固たるものあり。約一ヶ月にわたり、苦悩に苦悩を重ねたる結果、戦争決意に到達したものの如く、次長の意見は極めて強固なり。右案果たして海軍または政府と意見一致するや否やに關し、総長以下大なる疑問を持ちあり。一致三分不一致七分と考えるあるが如く、内閣瓦解は必至なるべし。

と記している。

文中の「次長」は塚田攻（中将）、「総長」は杉山元（大将）を指している。攻は「おさむ」、元は「げん」と読む。

塚田は一八八六年（明治十九）茨城県に生まれ、一九一四年（大正三）陸軍大学を卒業した。関東軍参謀、中支那方面軍参謀長、陸軍大学校長などを経て四〇年に参謀本部次長に就任していた。

翌四一年十一月、南方軍参謀長となり、四二年十二月、第十一軍司令官のとき、中国・南京から帰国の途中で搭乗していた飛行機が墜落して死亡した。死後、大将に昇進し

ている。

杉山は一八八〇年（明治十三）生まれ、福岡県出身。一九〇〇年（明治三十三年）陸軍士官学校を卒業し、日露戦争に従軍した。一九一〇年（明治四十三年）に陸軍大学校を卒業、一九一五年（大正四）駐インド大使館付武官。

二八年（昭和三年）陸軍軍務局長に進み、第十二師団長、航空本部長を経て三六年（昭和十一年）教育總監・大将に昇進した。林銑十郎内閣、第一次近衛内閣で陸相、一九四〇年に参謀総長に就任した。四三年元帥となり、四五年九月十二日、拳銃で自決した。

先回りだが、杉山の自決について話しておく、巷間に流布しているのは、

——戦犯として逮捕されるのを忌避した。

という説である。

おそらくこの説は正しいのだが、杉山が自決した理由は逮捕と裁判への恐れではなかった。陸軍大臣、参謀総長、元帥という経歴からいって、死刑か無期懲役は回避できない。

実をいうと、その前日、杉山は新しい憲法の草案を目にしていた。天皇制が護持できること、民主国家への転換が図られること、戦争の放棄が明文化されていることを確認したうえで、この覚悟だった。心情的にいえば潔いサムライ的

な、客観的にいえば身勝手な完結であったといつて差し支えない。

二

八月二十二日付の『機密戦争日誌』は、「対米英戦決意」の文字が現れる最初とされている。さらに近衛内閣が崩壊し東条内閣が発足した十月十八日、第二十班は手放して喜んでゐる。

いかなることあるといえども、新内閣は開戦内閣ならざるべからず。開戦、開戦、これ以外に陸軍の進むべき途なし。

ところが二か月後にトーンが一変した。

・十月二十三日付

陸相は絶対に目途なしとして、内閣を倒したるものなり。今更目途なき対米外交を続行し、決心をにぶらせるは国家の不為ならずや。陸相に節操ありやと問ひ度。

陸相に節操ありや、とは穏やかでない。

参謀本部職員が東条を「陸相」と呼んでいるのは、東条が内閣総理大臣でありながら陸軍大臣、内務大臣を兼務していたからである。また批判に転じたのは、東条が首相に就任したとき、内大臣・木戸幸一が「陛下のお言葉」として、

——慎重なる考究を加えることを要す。
と耳打ちしたことによつていた。

東条はこの一言で、開戦一本やりから慎重論に転換した。十一月一日に開かれた連絡会議に先立って、東条は参謀総長・杉山元を首相官邸に招いて会談した。そのとき東条が示した案は三つあった。

- 一、戦争を極力避け臥薪嘗胆する。
- 二、開戦を直ちに決意し、政戦略の諸施策をこの方針に集中する。
- 三、戦争決意のもとに、作戦準備を完整すると共に、外交施策を続行して妥結に努める。

「政戦略」は見慣れない熟語だが、連合艦隊司令長官・山本五十六がいうところの「攻勢作戦」のことであろう。緒戦でアメリカ、イギリスを叩き、攻めに攻めて優勢なうちに講話を結ぶという作戦である。

これに対して杉山は言った。

「外交がうまく行けば準備した兵を下げることになる。これは困る。内地から二十万、支那からもやるべき作戦をやめて兵を送つておる。兵を南洋まで出して、戦争しないで退けたら、士氣に關す」

外交がうまく行けば戦争という事態を回避できるのだから、喜ぶべきであらう。ところが杉山は「困る」と言う。

御前会議で決定された要綱に従つて、陸軍はすでに十個師団以上の兵員を南方に輸送しつゝあった。武器弾薬や食糧なども、着々と準備を整えていた。いままら引き揚げを命じることはできない。「士氣に關す」とは、何とも逆立ちした言い分であつた。

杉山の一言で東条は第一案を放棄した。そもそも同腹だったのだから当然といえば当然だったが、ここで東条は開戦決意の責任を杉山に転嫁したともいえる。

この決定が出て以後の『機密戦争日誌』は、ひたすら日米交渉の決裂、戦争の勃発を望む内容に変わつている。その記述を見るに、戦略や計画といった頭脳回路を使う作業が一切欠落していて、あるのは好戦的な感情である。陸軍参謀本部に勤務する佐官たちは、政府の決定に面従腹背する増長傲慢ぶりであつた。

・十一月十三日付

来栖大使の飛行機遅々たるは可。「ル」大統領、来栖大使を迎えるの態度に熱意なきが如きは、また可なり。

・十一月十七日付

昨は妥協、今日は決裂、一喜一憂しつ時日は経過す。一刻も速かに十二月一日の来たらんことを禱る。

・十一月二十一日付

野村電到着。乙案提示せるところ、「ハル」は援蔣中止に関し、これは援英中止要求と同様なりとて、大いに不満の態たりしが如し。さもあるべし。これにて交渉はいよいよ決裂すべし。目出度めでたし。

・十一月二十三日付

対米交渉の峠もここ数日中なり。願わくば決裂に到らんことを祈る。

・十一月二十七日付

米の回答全く高圧的なり。交渉は勿論決裂なり。之にて帝国の開戦決意は踏み切り容易となれり。目出度く之天佑ともいふべし。

・十一月二十九日付

午前九時三十分より総理、重臣を宮中に召集し、開戦決意に関し説明諒解を求む。参集の重臣左の如し。

阿部、林、岡田、米内、若槻、広田、平沼、近衛、原。

更に御前に於て重臣と懇談す。非戦論少なからず。独り阿部、林、広田は首相の決意を諒とせるが如し。他の非戦論者に対しては総理、阿部、林、広田が説得之勉め、最後に於て全員同意し、政府を鞭撻する所あり。

国家興亡の歴史を見るに国を興すものは青年、国を亡ぼすものは老年なり。重臣連の事勿れ心理も已むなし。若槻、平沼連の老衰者に皇国永遠の生命を托する能わず。

陸軍参謀本部の中堅将校にかかつては、「元老」と称され「重臣」とされた人々も形無しであった。

三

第二次大戦の太平洋戦争は、日本軍が真珠湾を奇襲で攻撃したことがクローズアップされる。だがアメリカ海軍も日本との開戦を前提に、準備行動を開始していたことは意外と知られていない。

国防衛計画「レインボー5号」の中の海軍基本戦略

「WPL46」がそれである。

それによるとアメリカ軍は、太平洋に浮かぶミッドウェー、ウエーキ、ジョンストン、パルミラ、サモア、グアムの諸島を結ぶラインを第一の防衛線に想定していた。十月十六日に発令された作戦に従って、アメリカ海軍は次のように艦船の配備を強化した。

・ジョンストン島に第三機動部隊・重巡洋艦一、駆逐艦五

・ミッドウェー、ウエーキ・潜水艦各二。

・サモア・重巡洋艦一、機雷敷設船一

・第十二機動部隊（基幹空母「レキシントン」）海兵隊
戦闘機十八機を増強。

このような増強は日本を挑発するに等しかった。

ただしアメリカ政府および両軍司令部は十一月二十七日の時点でも、日本軍が戦端を開く正面はインドシナ半島からフィリピン、ボルネオにかけての南西太平洋地域と予測していた。この方面には、イギリスとオランダの両極東軍が控え、かつアメリカはフィリピンに八万人の兵力を有していた。

アメリカ、日本の双方ともに、

「もし相戦わば」

と想定していたのは、西南太平洋地域ないし、中南太平洋地域（小笠原諸島―マリアナ諸島を結ぶ海域）だったから、ミッドウェー、ウエーキへの守備隊派遣は予防的措施以外のなものでもなかった。

ハワイに本営を置いていたアメリカ太平洋艦隊が睨んでいたのはマリアナ、フィジー、サモア、サンゴ海、フィリピンの海域だった。

広大な海域を守るのにアメリカ太平洋艦隊は航空母艦四隻、旧式で訓練用の「ユタ」を含む戦艦五隻しか保有していなかった。相手の出方を覗うより他にどんな手があるのか。

一方、日本帝国海軍はロシア艦隊を打ち破った東郷平八郎の兵略が、脳裏に強くこびついていた。長駆やってくる敵の大艦隊を真正面で待ち受け、敵艦隊より射程距離が長く破壊力が大きな大艦巨砲で決戦を挑む、という考え方である。

このため対米開戦を準備するに当たって海軍参謀本部が描いたのは、小笠原諸島からマリアナ諸島にかけての海域での艦隊決戦だった。

ところが山本五十六が指示したのは、日米の共通認識から大きく外れたハワイ強襲作戦だった。その研究は一九四

一年の一月、山本から直接、第十一航空艦隊参謀長（少将）の大西瀧治郎に伝えられたとされている。大西は四月に案をまとめ、山本に直接手交した。艦隊幕僚に正式な研究課題として示されたのは五月である。

当初、幕僚たちは山本の考えに反対、もしくは懐疑を示した。

理由は四つあった。

第一の理由は、相手を英・蘭に限定すべきである、というものだった。アメリカを巻き込むのは絶対的な不利を生じさせるであろう。大局的な視点で見るとき、この主張は正しかったともいえるし、遅かれ早かれアメリカが参戦してくることを考えれば消極的に過ぎた。

第二は、日本ないし周辺のどこから出航するにせよ、敵に気づかれずにハワイまで三千哩（カイリ）の航行を成し得るかどうか。

第三は、仮にハワイ近海にたどり着けたとして、そこに敵艦隊が待ち受けていたら、勝算はどうか。

第四は兵を訓練する時間だった。

これに対して山本は言った。

——戦争というものは、勝つても負けても神様が喜ぶことではない。これは博打である。


~~~~~ 補注 ~~~~~

『日本歴史シリーズ・太平洋戦争』一九七八、世界文化社。収録論説の著者は大宅壮一、青地晨、児島襄、江崎誠致、高木俊朗、巖谷大四、島田俊彦、杉森久英、加藤秀俊、小松伸六、河北倫明である。

『太平洋戦争』上・下 児島襄、一九六五、中央公論新社。中公新書。

『零式戦闘機』『零戦燃ゆ』 柳田邦男、一九七七、文藝春秋。『零戦燃ゆ』(飛翔編、熱闘編、渾身編)はその続編として位置づけられるが、より広範に太平洋戦争を追っている。

『戦後史の謎を追う』上・下 秦郁彦、一九九三、文藝春秋。

秦 郁彦 はた・いくひこ/1932) …山口県に生まれ五六年東大法学部を出てハーバード大学、コロンビア大学に留學した。防衛研修所教官、防衛大学校講師、大蔵省財政史室長、プリンストン大学客員教授、千葉大学教授。

『機密戦争日誌』 一九四〇年六月一日から一九四五年八月一日まで、大日本帝国陸軍大本営陸軍部第二十班(戦争指導班)の業務日誌。日誌担当者として種村佐孝、原四郎、野尻徳雄、田中敬二、甲谷悦雄、橋本正勝の六人の名前が挙がっている。

一九四五年八月十四日、庶務を担当していた中根吾一という少尉が上官の山田成利という大佐の許可を得て搬出し、ドラム缶に入れ自宅の敷地に埋設した。それを元第二十班員の原四郎が継承した。

種村佐孝 たねむら・さこう/1904~1966。名の読みは

「すけたか」とも。ポツダム宣言にかかわってはソ連と同盟して対米戦争を継続する工作に従事した。最終階級は大佐。

原 四郎 はら・しろう/1911~1991。終戦時は陸軍中佐だった。戦後、航空幕僚監部調査課長、戦史編纂官を経て伊藤忠電子計算サービス取締役となった。読売新聞社長副社長・原四郎(1908~1889)とは同名異人。

野尻徳雄 のじり・のりお/生没年未詳。戦後、陸上自衛隊幕僚監部第四部長、第十師団長となった。

田中敬二 陸軍大学校輜重兵科卒。終戦時は参謀本部作戦課・陸軍大佐だった。

甲谷悦雄 こうたに・えつお/国立公文書館「アジア歴史資料センター」の記録には、ドイツ大使館付武官補佐官、関東軍参謀、参謀本部ロシア班長、参謀本部露西亜班長、大本営一部十五課長、独逸大使館付武官補佐官とある。「旧帝国陸軍切つての国際共産主義運動の分析官」とされる。

橋本正勝 はしもと・まさかつ/国立公文書館「アジア歴史資料センター」の記録には、関東軍補給参謀、軍務局課員、大本営参謀、第二総軍参謀とある。終戦時、陸軍中佐。

『機密戦争日誌』序文 誤解を避けるために改めて書くと、この序文は『大本営陸軍部戦争指導班 機密戦争日誌』全三巻(防衛研究所図書館所蔵、軍事史学会編、一九九八、錦正社)が出版された際、伊藤隆氏(軍事史学会会長・政策研究大学院大学教授)が「刊行にあたって」と題して付記したものである。

レインボーイ5 第二次世界大戦前、アメリカ合衆国が有事を想定して策定していた基本計画。レインボーイ1はナチス・ドイツ軍が南米に上陸した場合、同2はアメリカがイギリス、フランスと連

合して大西洋でナチス・ドイツと、太平洋で大日本帝国と戦う場合、同3はアメリカが単独で大日本帝国と戦う場合、同4は1、2、3のバリエーション、同5は大西洋・欧州大陸での戦い（対ナチス・ドイツ戦）を優先する場合を想定していた。ナチス・ドイツとイギリスが同盟を結んだ場合、ソ連を仮想敵とする軍事プランもあったといわれる。

# 日本IT書紀 060 機密戦争日誌

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。